

令和7年度 徳島文理大学 数理・データサイエンス・AIプログラム（リテラシーレベル） 自己点検・評価

1 プログラムの履修・修得状況

教員は学内システム（ポータルシステム）や Google Classroom により学生の出欠状況の確認、レポートや課題の配信、提出状況を把握できるようになっており、学修状況を随時把握できるようにしている。また、プログラムの履修・修得状況及び成績評価等のデータは教務部教務課において学務システムよりダウンロードし、「数理・データサイエンス・AI教育推進委員会」に送られ、委員会で各学科のプログラムの履修・修得及び成績評価等の状況を分析・検証している。

令和7年度は、対象科目の**履修者数が922名（R6：734名）、修了者数が831名（R6：699名）**であり、**令和6年度に比べ履修者数が188名、修了者数が132名増加した**。また、履修者数を採用定員で割った令和5年度からの**累積履修率においても43.2%（R6：27.0%）と増加傾向**にある。

2 学修成果

本プログラムを履修することで、次のような能力（学修成果）を身につけることを目的として実施している。

- ① 今後のデジタル社会において、数理・データサイエンス・AIを日常の生活、仕事等の場で使いこなすことができる基礎的素養を主体的に身に付けること。
- ② 学修した数理・データサイエンス・AIに関する知識・技能をもとに、これらを扱う際には、人間中心の適切な判断ができ、不安なく自らの意志でAI等の恩恵を享受し、これらを説明し、活用できるようになること。

このため、FD研究部会により全学的に実施している「全学授業アンケート」の結果等をもとに「数理・データサイエンス・AI教育推進委員会」において、これらの学修成果を総合的に分析することによって、本プログラムを検証・評価し、プログラムの改善充実に繋げている。

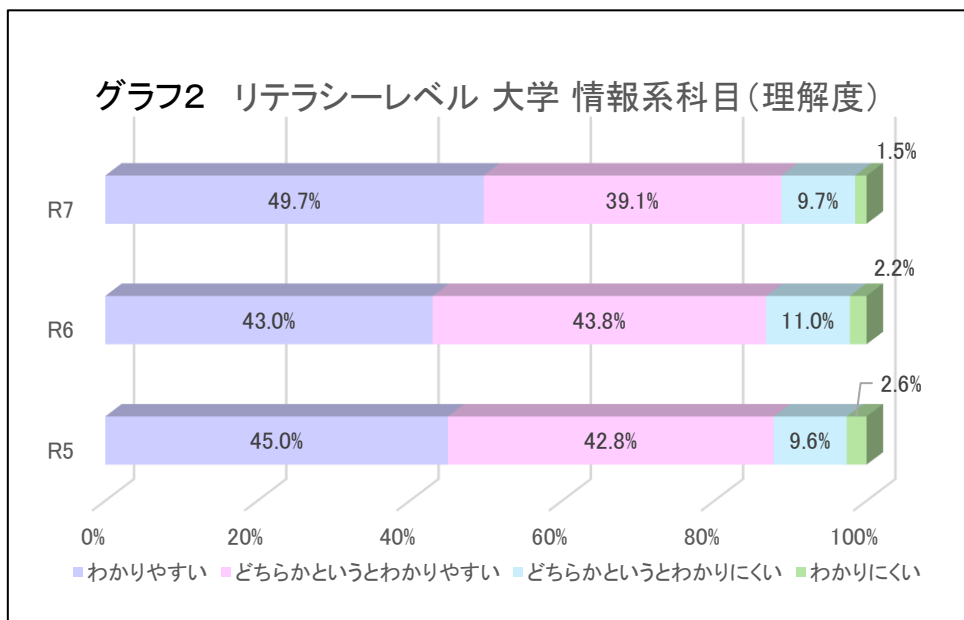
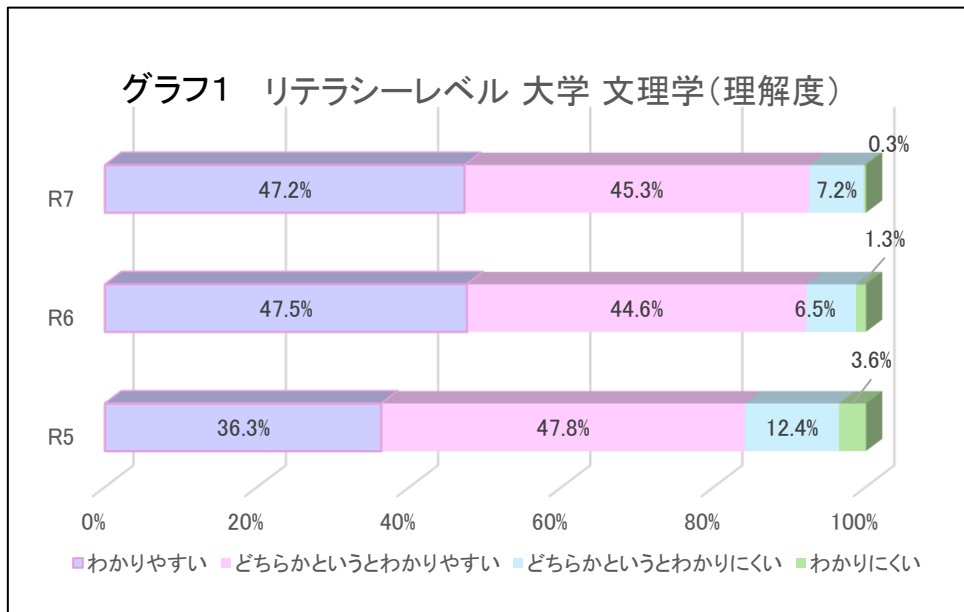
3 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度

本学においては、全ての科目、全ての学生を対象にFD研究部会が「全学授業アンケート」を前・後期ごとに実施しており、本プログラムの構成科目についても、受講者全員に授業アンケートを実施し、学生の理解度・満足度等を分析している。

令和7年度におけるアンケート項目のうち、「わかりやすさ」について、

「文理学」では、「わかりやすい内容であった」「どちらかというわかりやすい内容であった」をあわせて、**R7:92.5%**（R6:92.1%、R5:84.1%）[グラフ1]であり、

「情報系科目」では、「わかりやすい内容であった」「どちらかというわかりやすい内容であった」をあわせて、**R7:88.8%**（R6:86.8%、R5:87.8%）[グラフ2]となっており、本プログラムに対する学生の理解度は少しずつだが高くなっていることがわかる。今後も本プログラムの改善充実に努め、理解度をさらに一層向上させていきたい。



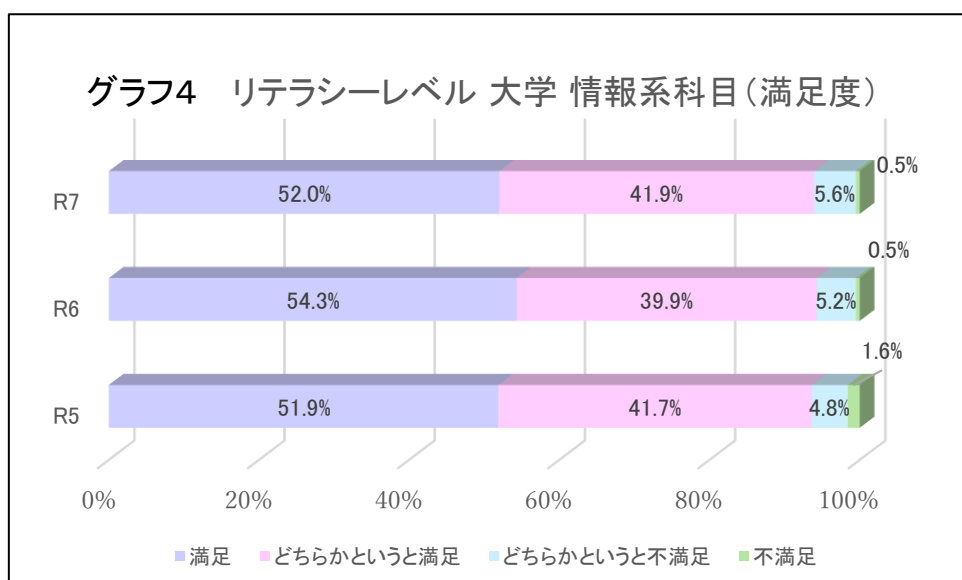
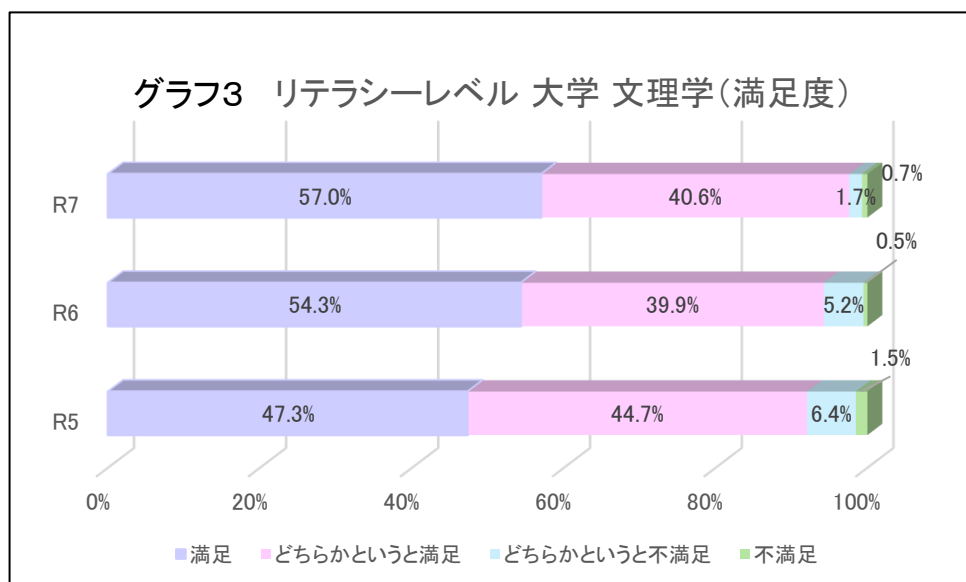
4 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度

次に、「満足度」については、

「文理学」では、「満足」、「どちらかといえば満足」をあわせて、R7:97.6% (R6:94.2%、R5:92.0%) [グラフ3] であり、

「情報系科目」では、「満足」、「どちらかといえば満足」をあわせて、R7:93.9% (R6:92.1%、R5:93.6%) [グラフ4] となっており、本プログラムに対する満足度についても高い状況である。

また、「AIやデータ分析に関することなど幅広く学べたので良かった。このプログラムで学んだことを社会に出て使えるようさらに学びを深めたい。」など、本プログラムに対する肯定的な意見も多く見られた。



5 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

本学では新入生が大学の使命や目的、建学精神を理解して勉学に邁進する強い意志と卒業に至る勤勉な態度を自ら育てることを目的として「文理学」を実施しており、全学部・学科で必修科目としている。この「文理学」に全学部共通講座として「数理・データサイエンス・AI入門①～⑦」7コマを組み込み、オムニバス方式で7人の教員が1コマずつ担当している。実施形態については、徳島キャンパスは「むらさきホール（収用定員 1314 人）」、高松駅キャンパスは「ムラサキキネンホール（収用定員 800 人）」にそれぞれ1年生全員が入り、キャンパス間での相互遠隔授業を実施している。

本プログラムは、「文理学」と「情報処理」などの情報系科目1科目から構成されている。特に、一般総合科目の「情報処理」は、大学での学修に欠かせないパソコンをうまく使いこなすために必要な科目であり、選択必修科目として位置づけることにより履修率の向上に繋げている。

6 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

本プログラムは令和5年度の入学生から実施しており、修了者は卒業していない状況である。

本学では就職支援部が卒業生や卒業生の就職先の企業、団体等に対してアンケートを実施しており、令和6年度は、2022年から2024年までの3年間に理学療法学科卒業した人と就職した病院や事業所等に対し、また、令和7年度は、2022年から2024年までの3年間に看護学科卒業した人と就職した病院や事業所等に対し、本学で学んだ学修成果を仕事で活かしているかなどのアンケートを実施した。今後は、アンケートの対象学科を増やすなどにより、本プログラムを修了した卒業生活躍状況等を広く把握できるようにし、プログラムの改善・充実に繋げていく。

7 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

本学では、就職支援部が地元企業等と本学の教育内容や学修成果に関する意見交換会を実施しており、令和7年度は6事業所に対して学修成果に関するアンケートを実施した。そのアンケート結果によると、学修成果の参考となる「ディプロマ・サプリメント」や「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」についての認知度はまだまだ低い状況であり、今後は本学の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」の取組について産業界への広報を工夫し認知度を高めるとともに、本プログラム修了者の学修成果についても、学生の採用者側としての意見や提言を積極的に聴取し、プログラムの改善・充実に繋げていく。

8 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

本プログラムは、①数理・データサイエンス・AIを活用することの「楽しさ」や「学ぶことの意義」を重点的に教え、学生に好奇心や関心を高く持ってもらう魅力的かつ特色ある教育を行うこと、また、数理・データサイエンス・AIを活用することが「好き」な人材を育成し、それが自分・他人を含めて、次の学修への意欲、動機付けになるような「学びの相乗効果」を生み出すことを狙うこと、②カリキュラムを実施するにあたっては、本学の教育目的、分野の特性、個々の学生の学習歴や習熟度合い等に応じて、モデルカリキュラムの中から適切かつ柔軟に選択・抽出し、有機性を考慮した教育を行うこと、③実データ、実課題を用いた演習など、社会での実例を題材に数理・データサイエンス・AIを活用することを通じ、現実の課題と適切な活用法を学ぶことをカリキュラムに取り入れること、などを念頭に置いた教育プログラムである。本プログラムの構成科目における授業アンケート結果から、前述の①～③の観点について、各授業科目レベルでの検証・評価を実施し、改善充実に繋げている。

9 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること

本学では、全学的に学生に対して「授業アンケート」を前・後期末に実施している。本プログラムの構成科目全てにおいても授業アンケートを行っており、授業のわかりやすさ、学生の満足度、改善点などの把握に努めている。この授業アンケート結果をもとに授業のわかりやすさ、授業内容・水準が学生に適切であるかどうかについて点検・評価を行うことで、教育の質向上に向けた改善を行っている。

今後も「数理・データサイエンス・AI教育推進委員会」を中心に本プログラムの検証・評価を行い、プログラムの見直しを行うとともに、教育の質向上に取り組んでいく。

令和7年度 徳島文理大学短期大学部 数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル） 自己点検・評価

1 プログラムの履修・修得状況

教員は学内システム（ポータルシステム）や Google Classroom により学生の出欠状況の確認、レポートや課題の配信、提出状況を把握できるようになっており、学修状況を随時把握できるようにしている。また、プログラムの履修・修得状況及び成績評価等のデータは教務部教務課において学務システムよりダウンロードし、「数理・データサイエンス・AI教育推進委員会」に送られ、委員会で学科ごとのプログラムの履修・修得及び成績評価等の状況を分析・検証している。

令和7年度は、対象科目の履修者数が67名（R6：53名）、修了者数が65名（R6：47名）であり、令和6年度に比べ履修者数が14名、修了者数が18名増加した。また、履修者数を収用定員で割った令和5年度からの累積履修率についても48.9%（R6：24.8%）となり増加傾向にある。

2 学習成果

本プログラムを履修することで、次のような能力（学習成果）を身につけることを目的として実施している。

- ① 今後のデジタル社会において、数理・データサイエンス・AIを日常の生活、仕事等の場で使いこなすことができる基礎的素養を主体的に身に付けること。
- ② 学修した数理・データサイエンス・AIに関する知識・技能をもとに、これらを扱う際には、人間中心の適切な判断ができ、不安なく自らの意志でAI等の恩恵を享受し、これらを説明し、活用できるようになること。

このため、FD研究部会により全学的に実施している「全学授業アンケート」の結果等をもとに「数理・データサイエンス・AI教育推進委員会」において、これらの学修成果を総合的に分析することによって、本プログラムを検証・評価し、プログラムの改善充実に繋げていく。

3 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度

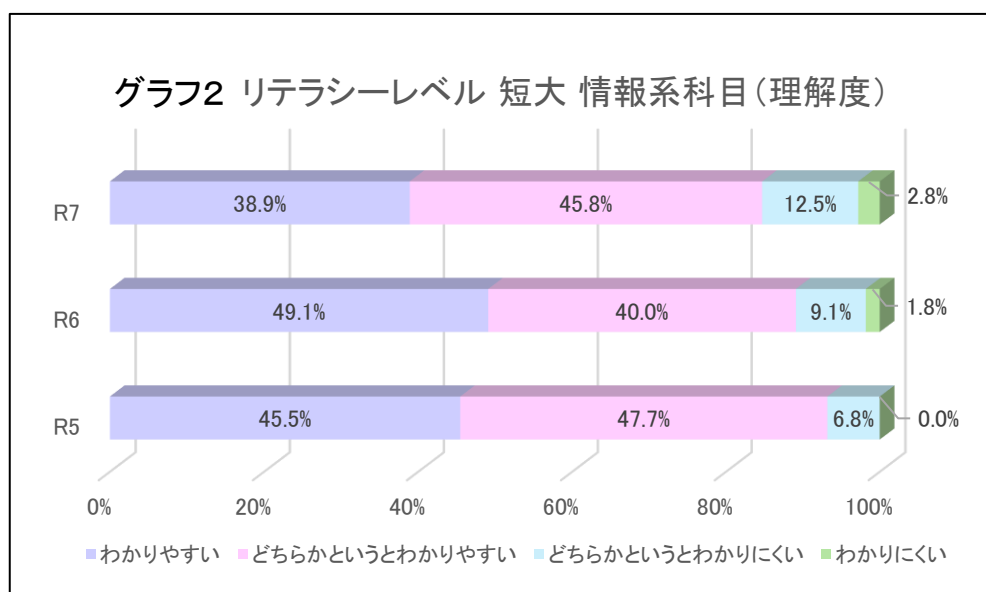
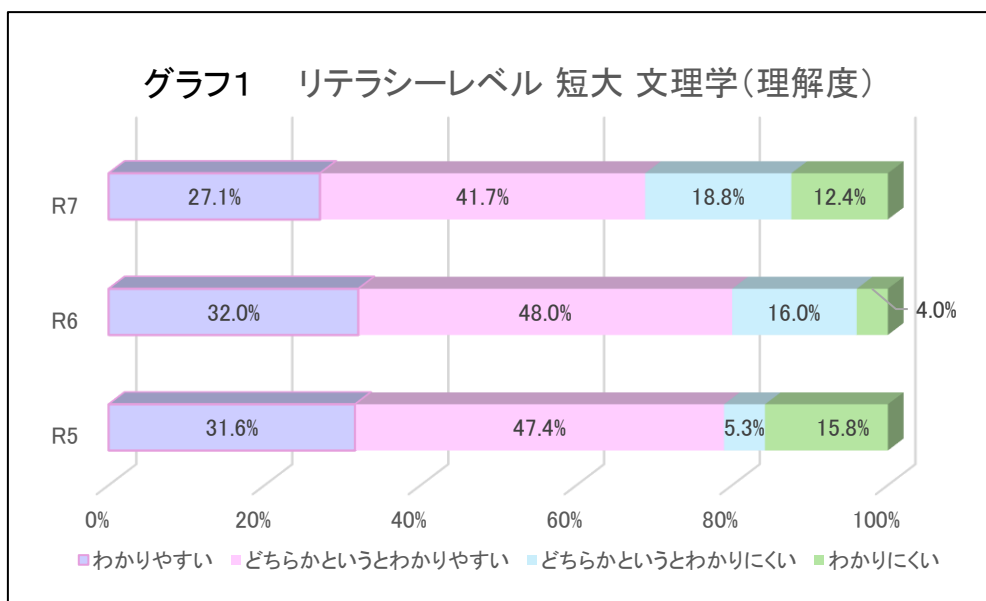
本学においては、全ての科目、全ての学生を対象にFD研究部会が「全学授業アンケート」を前・後期ごとに実施しており、本プログラムの構成科目についても、受講者全員に授業アンケートを実施し、学生の理解度・満足度等を分析している。

アンケート項目のうち、「わかりやすさ」について、

「文理学」では、「わかりやすい」「どちらかというわかりやすい」をあわせて、R7:68.8%（R6:88.0%、R5:79.0%）[グラフ1]と減少しており、「わかりにくい」「どちらかというわかりにくい」が増加している。

「情報系科目」では、「わかりやすい」「どちらかというわかりやすい」をあわせて、R7:84.7%（R6:89.1%、R5:93.2%）[グラフ2]であり、「文理学」「情報系科目」ともに「わかりにくい」「どちらかというわかりにくい」と感じている学生が増加している。このような現状を受け止め、「どんなところが難しいのか」などについて分析するなかで、よりわかり

やすい授業をめざし、本プログラムの改善充実を図っていく。



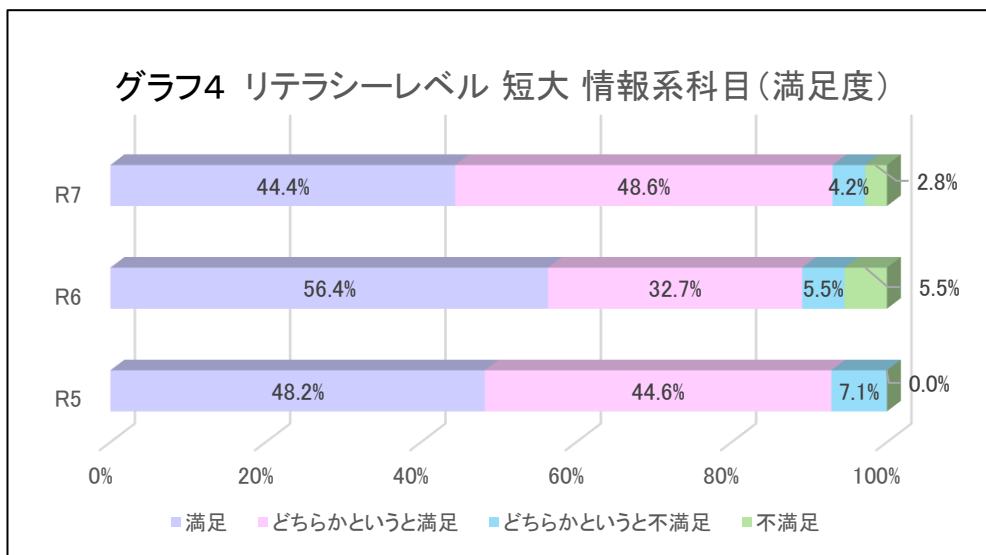
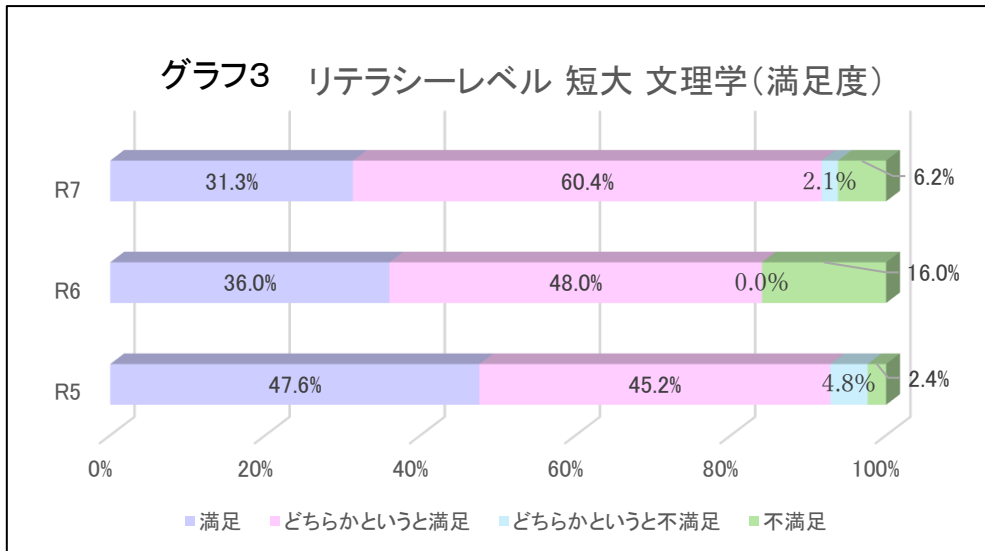
4 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度

全学授業アンケートの結果で満足度については、

「文理学」では、「満足」「どちらかといえば満足」をあわせて、R7:91.7% (R6:84.0%、R5:92.8%) [グラフ3] であり、

「情報系科目」では、「満足」「どちらかといえば満足」をあわせて、R7:93.0% (R6:89.1%、R5:92.8%) [グラフ4] となっており、本学の教育プログラムに対する満足度についても高い状況である。

また、「データサイエンスは難しい内容があったが、将来役に立つと思った。今後のAI活用方法について詳しく知ることができて良かった。このプログラムで学んだことを社会に出たら使えるようになりたい。」など、本プログラムに対する肯定的な意見も多く見られた。



5 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

本学では新生が大学の使命や目的、建学精神を理解して勉学に邁進する強い意志と卒業に至る勤勉な態度を自ら育てることを目的として「文理学」を実施しており、全学部・学科で必修科目としている。この「文理学」に全学部共通講座として「数理・データサイエンス・AI入門①～⑦」7コマを組み込み、オムニバス方式で7人の教員が1コマずつ担当している。実施形態については、徳島キャンパスは「むらさきホール（収用定員 1314 人）」、高松駅キャンパスは「ムラサキキネンホール（収用定員 800 人）」にそれぞれ1年生全員が入り、キャンパス間での相互遠隔授業を実施している。

本プログラムは、「文理学」と「情報リテラシー」の情報系科目1科目から構成されている。特に、一般総合科目の「情報リテラシー」は、短期大学部での学修に欠かせないパソコンをうまく使いこなすために必要な科目であり、選択必修科目として位置づけることにより履修率の向上に繋げている。

6 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

令和6年度末に、最初の修了者60名が卒業したところである。本学では、就職支援部が卒業生や卒業生の就職先の企業、団体等に対してアンケートを実施しており、令和6年度は、2022年から2024年までの3年間に理学療法学科を卒業した人と就職した病院や事業所等に対し、また、令和7年度は、2022年から2024年までの3年間に看護学科を卒業した人と就職した病院や事業所等に対し、本学で学んだ学修成果を仕事で活かしているかなどのアンケートを実施した。今後は、アンケートの対象学科を増やすなどにより、本プログラムを修了した卒業生活躍状況等を広く把握できるようにし、プログラムの改善・充実に繋げていく。

7 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

本学では、就職支援部が地元企業等と本学の教育内容や学修成果に関する意見交換会を実施しており、令和7年度は6事業所に対して学修成果に関するアンケートを実施した。そのアンケート結果によると、学修成果の参考となる「ディプロマ・サプリメント」や「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」についての認知度はまだまだ低い状況であり、今後は本学の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」の取組について産業界への広報を工夫し認知度を高めるとともに、本プログラム修了者の学修成果についても、学生の採用者側としての意見や提言を積極的に聴取し、プログラムの改善・充実に繋げていく。

8 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

本プログラムは、①数理・データサイエンス・AIを活用することの「楽しさ」や「学ぶことの意義」を重点的に教え、学生に好奇心や関心を高く持ってもらう魅力的かつ特色ある教育を行うこと、また、数理・データサイエンス・AIを活用することが「好き」な人材を育成し、それが自分・他人を含めて、次の学修への意欲、動機付けになるような「学びの相乗効果」を生み出すことを狙うこと、②カリキュラムを実施するにあたっては、本学の教育目的、分野の特性、個々の学生の学習歴や習熟度合い等に応じて、モデルカリキュラムの中から適切かつ柔軟に選択・抽出し、有機性を考慮した教育を行うこと、③実データ、実課題を用いた演習など、社会での実例を題材に数理・データサイエンス・AIを活用することを通じ、現実の課題と適切な活用法を学ぶことをカリキュラムに取り入れること、などを念頭に置いて教育プログラムを策定した。本プログラムの構成科目における授業アンケート結果から、前述の①～③の観点について、各授業科目レベルでの検証・評価を実施し、改善充実に繋げている。

9 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること

本学では、全学的に学生に対して「授業アンケート」を前・後期末に実施している。本プログラムの構成科目全てにおいても授業アンケートを行っており、授業のわかりやすさ、学生の満足度、改善点などの把握に努めている。この授業アンケート結果をもとに授業のわかりやすさ、授業内容・水準が学生に適切であるかどうかについて点検・評価を行うことで、教育の質向上に向けた改善を行っている。

今後も「数理・データサイエンス・AI教育推進委員会」を中心に本プログラムの検証・評価を行い、プログラムの見直しを行うとともに、教育の質向上に取り組んでいく。

1 プログラムの履修・修得状況

教員は学内システム（ポータルシステム）や Google Classroom により学生の出欠状況の確認、レポートや課題の配信、提出状況を把握できるようになっており、学修状況を随時把握できるようにしている。また、プログラムの履修・修得状況及び成績評価等のデータは教務部教務課において学務システムよりダウンロードし、「数理・データサイエンス・AI教育推進委員会」に送られ、委員会で学科ごとのプログラムの履修・修得及び成績評価等の状況を分析・検証している。

令和7年度は、対象科目の**履修者数が86名（R6：54名）、修了者数が63名（R6：45名）**であり、**令和6年度に比べ履修者数が32名、修了者数が18名増加**した。また、履修者数を収用定員で割った令和5年度からの**累積履修率においても52.3%（R6：32.7%）と増加傾向**にある。

2 学修成果

本特定プログラムを履修することで、次のような項目について学習し、履修者がそれぞれの学科で学ぶ教育内容を補強し、卒業研究や卒業後に大きな付加価値となることをめざす。

- ① データ駆動型社会においてデータサイエンスを学ぶことの意義を説明できる。
- ② 分析目的に応じ、適切なデータ分析方法、データ可視化方法を選択できる。
- ③ データを収集・処理・蓄積するための技術の概要を理解する。
- ④ コンピュータでデータを扱うためのデータ表現の基礎を理解する。
- ⑤ AIのこれまでの変遷、各段階における代表的な成果物や技術背景を理解する。
- ⑥ 今後、AIが社会に受け入れられるために考慮すべき論点を理解する。
- ⑦ 自らの専門分野にAIを応用する際に求められるモラルや倫理について理解する。
- ⑧ 機械学習（教師あり学習、教師なし学習）、深層学習、強化学習の基本的な概念を理解する。
- ⑨ 複数のAI技術が組み合わされたAIサービス/システムの例を説明できる。

このために、全学的に実施している授業アンケートの結果を総合的に分析することによって、学科ごとの傾向を把握して、学科による理解度の差が大きくなるように注意して、できる限り多くの学生にとって今後のさらなる「学び」につながるよう、改善を図っている。

3 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度

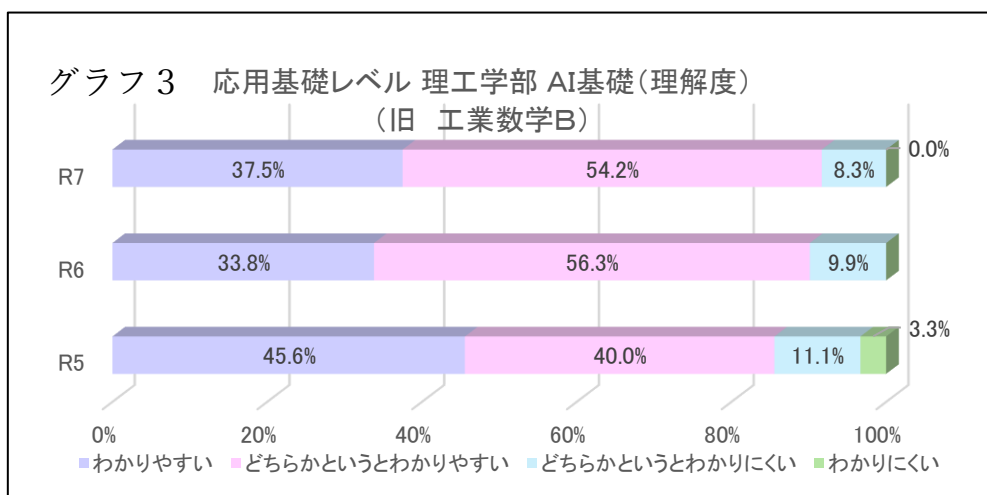
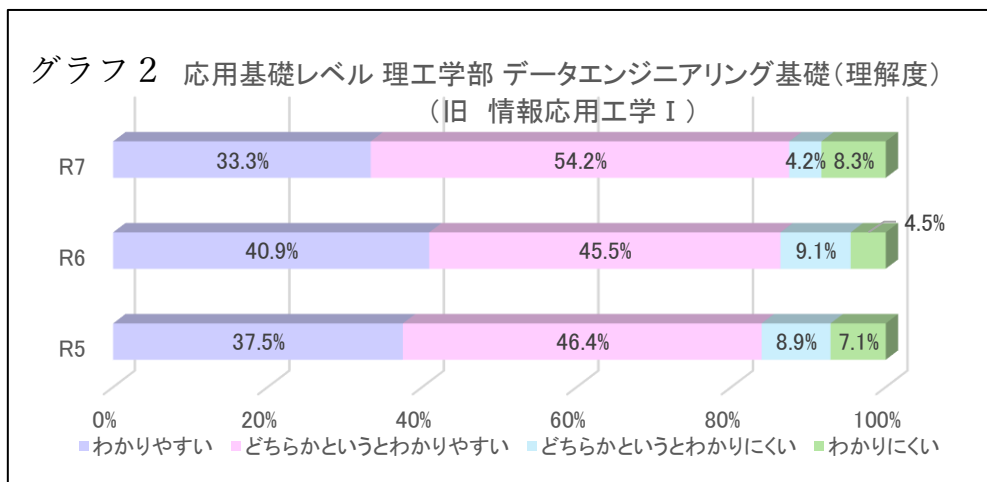
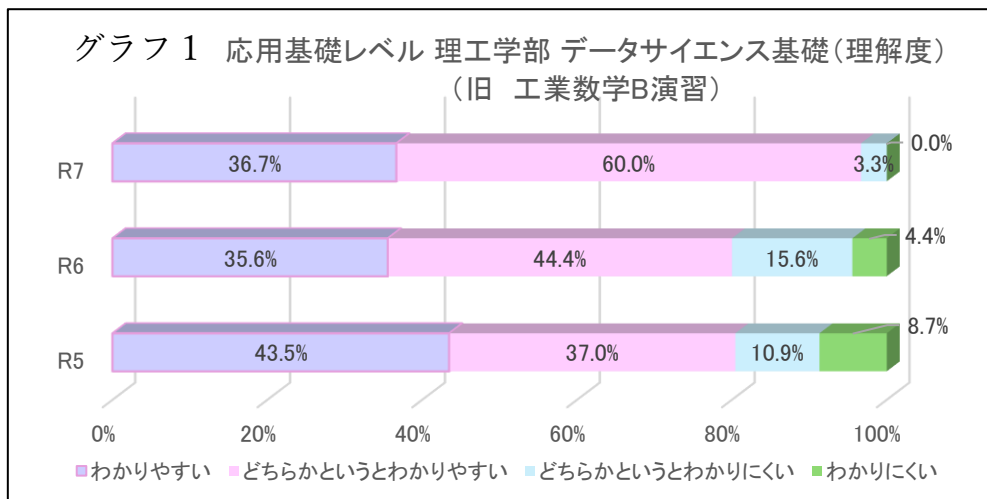
本プログラム履修者全員に対しても全学的に実施している授業アンケートを実施している。令和5年度は、本プログラムを構成する科目を開講した初年度ということから、他の科目と比較すると相対的に理解度が低い結果となった。この結果の総合的な分析結果について、本プログラムを構成する科目の担当教員を中心にして情報共有とさらなる分析を行い、次年度に向けた授業方法・内容の改善に活用している。

アンケート項目のうち、「わかりやすさ」については、プログラム構成科目の「データサイエンス基礎（工業数学 B 演習）」では、「わかりやすい」「どちらかというとわかりやすい」をあわ

せて、**R7:96.7%** (R6:80.0%、R5:80.5%) [グラフ1]、

「データエンジニアリング基礎 (情報応用工学 I)」では、**R7:87.5%** (R6:86.4%、R5:83.9%) [グラフ2]、「AI基礎 (旧 工業数学B)」では、**R7:91.7%** (R6:90.1%、R5:85.6%) [グラフ3] となっており、本学の教育プログラムについて、学生の理解度はかなり高くなっていることがわかる。

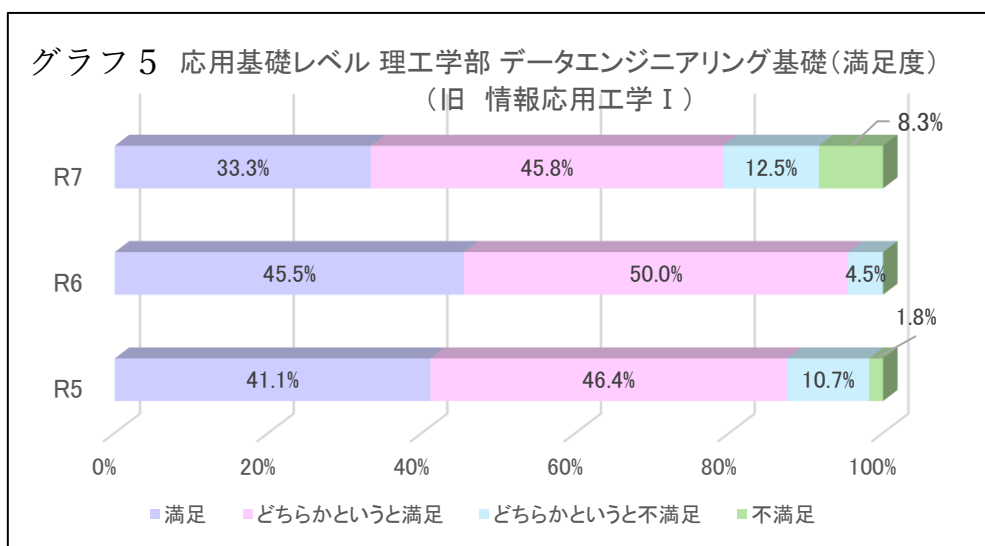
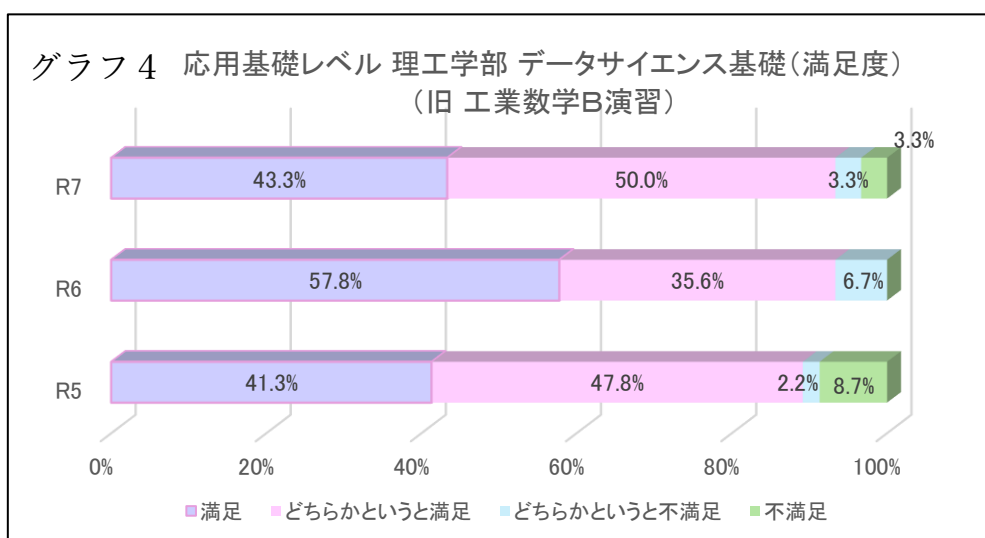
今後も本プログラムの改善充実に努め、理解度をさらに一層向上させていきたいと考えている。

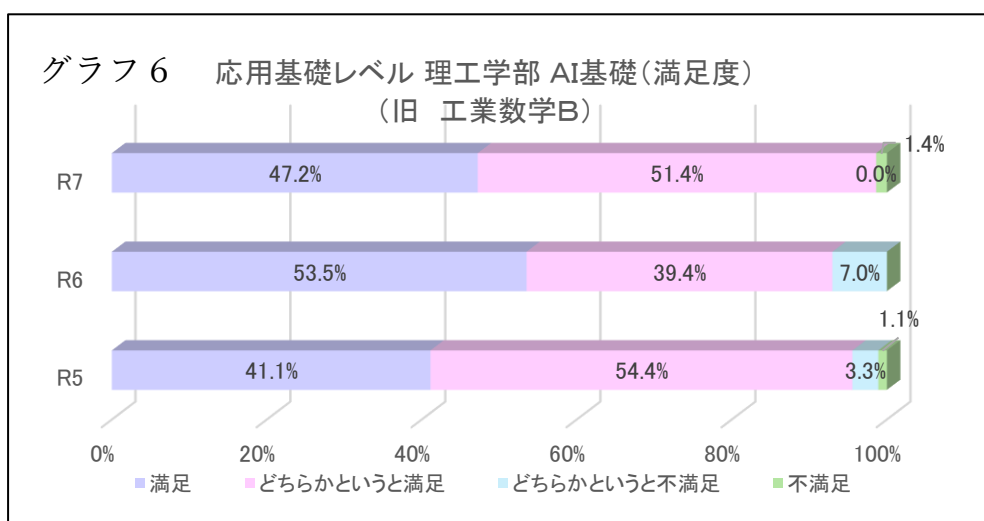


4 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度

全学授業アンケート結果から、「満足度」については、「データサイエンス基礎（旧 工業数学 B 演習）」では、「満足」「どちらかといえば満足」をあわせて、**R7:93.3%**（R6:93.4%、R5:89.1%）[グラフ4]、「データエンジニアリング基礎（旧 情報応用工学 I）」では、**R7:79.1%**（R6:95.5%、R5:87.5%）[グラフ5]、「A I 基礎（旧 工業数学 B）」では、**R7:98.6%**（R6:92.9%、R5:95.5%）[グラフ6] となっており、本プログラムに対する満足度は高くなっている。

また、「難しい内容が多かったけれどA Iについてたくさんのが学べて良かった。」など、本プログラムに対して、「データ分析に関する内容を興味深く学べた。」という意見も多く見られた。これらのことから、本プログラム修得者の**後輩等他の学生への推奨度は高いものと推察**される。学生の学習意欲を高めるために、授業に関する資料の掲載とグループワークに必要な情報を共有できる Web サイトにおいて保存されている感想等の意見も活用し、授業内容や指導方法の工夫改善を図っていく。





5 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

本プログラムを構成する科目については、令和5年度の「情報応用工学Ⅰ（選択）」「工業数学B（選択）」「工業数学B演習（選択）」を令和6年度から「データサイエンス基礎（必修）」「データエンジニアリング基礎（選択）」「AI基礎（選択）」に変更し、指導内容の見直しを図った。特に「AI基礎（選択）」については、学生の興味関心や産業界の必要性を勘案し指導内容等を工夫することにより、履修者数・履修率の向上に繋がっている。

6 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

本プログラムは令和5年度の入学生から実施しており、修了者は卒業していない状況である。

本学では就職支援部が卒業生や卒業生の就職先の企業、団体等に対してアンケートを実施しており、令和6年度は、2022年から2024年までの3年間に理学療法学科を卒業した人と就職した病院や事業所等に対し、また、令和7年度は、2022年から2024年までの3年間に看護学科を卒業した人と就職した病院や事業所等に対し、本学で学んだ学修成果を仕事で活かしているかなどのアンケートを実施した。今後は、アンケートの対象学科を増やすなどにより、本プログラムを修了した卒業生活躍状況等を広く把握できるようにし、プログラムの改善・充実に繋げていく。

7 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

本学では、就職支援部が地元企業等と本学の教育内容や学修成果に関する意見交換会を実施しており、令和7年度は6事業所に対して学修成果に関するアンケートを実施した。

そのアンケート結果によると、学修成果の参考となる「ディプロマ・サプリメント」や「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」についての認知度はまだまだ低い状況であり、今後は、本学の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」の取組について産業界への広報を工夫し認知度を高めるとともに、本プログラム修了者の学修成果についても、学生の採用者側としての意見や提言を積極的に聴取し、プログラムの改善・充実に繋げていく。

8 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

本プログラムは、①基礎的な数理的素養を含めリテラシーレベルの「選択（オプション）」をカバーする内容としたうえで、データサイエンス、データエンジニアリング、AIに関する知識・スキルを適切に補強することにより、自らの専門分野において数理・データサイエンス・AIを応用するための大局的な視点を身に付ける。②実データ、実課題を用いた演習など、社会での実例を題材とした教育を行うことで、現実の課題へのアプローチ方法および数理・データサイエンス・AIの適切な活用法の学習を組み込む。③主に学部2、3年を想定しつつ、個々の大学の実情、専門分野や進路等の多様性、意欲・能力のある学生の学修機会の確保を考慮し、柔軟にカリキュラムを設計する。④各大学・高専においてカリキュラムを実施するにあたっては、各大学・高専の教育目的、分野の特性、個々の学生の学習歴や習熟度合い等に応じて、本モデルカリキュラムの中から適切かつ柔軟に選択・抽出し、有機性を考慮した教育を行う。⑤各専門分野の特性に応じた演習やPBL等を効果的に組み入れることにより、実践的スキルの習得をめざすことを推奨する、などを念頭に置いて教育プログラムを策定した。本プログラムの構成科目における授業アンケート結果から、前述の①～③の観点について、各授業科目レベルでの検証・評価を実施し、改善充実に繋げている。

9 内容・水準を維持・向上しつつ、より「わかりやすい」授業とすること

本プログラム履修者全員に対しても全学的に実施している授業アンケートを実施している。

これまで、他の科目とアンケート結果を比較すると、専門的な内容を学べたという意見は相対的に多い反面、「難しい」と感じている学生が多かった。

そのため、現在の内容・水準を維持しつつ、履修者の「わかりやすさ」「興味関心を引く」という観点から講義の内容・実施方法を見直したことにより、履修者の理解度や満足度が高まりつつある。

令和7年度 徳島文理大学数理・データサイエンス・AI教育プログラム（応用基礎レベル） 人間生活学部自己点検・評価

1 プログラムの履修・修得状況

教員は学内システム（ポータルシステム）や Google Classroom により学生の出欠状況の確認、レポートや課題の配信、提出状況を把握できるようになっており、学修状況を随時把握できるようにしている。また、プログラムの履修・修得状況及び成績評価等のデータは教務部教務課において学務システムよりダウンロードし、「数理・データサイエンス・AI教育推進委員会」に送られ、委員会で各学科のプログラムの履修・修得及び成績評価等の状況を分析・検証している。

令和7年度は、対象科目の履修者数が59名（R6：52名）、修了者数が41名（R6：0名）であり、令和6年度の修了者がいなかったため41名の増加となった。また、履修者数を収用定員で割った令和5年度からの累積履修率は7.1%（R6：3.2%）となった。

2 学修成果

本特定プログラムを履修することで、次のような項目について学習し、履修者がそれぞれの学科で学ぶ教育内容を補強し、卒業研究や卒業後に大きな付加価値となることをめざす。

- ① データ駆動型社会においてデータサイエンスを学ぶことの意義を説明できる。
- ② 分析目的に応じ、適切なデータ分析方法、データ可視化方法を選択できる。
- ③ データを収集・処理・蓄積するための技術の概要を理解する。
- ④ コンピュータでデータを扱うためのデータ表現の基礎を理解する。
- ⑤ AIのこれまでの変遷、各段階における代表的な成果物や技術背景を理解する。
- ⑥ 今後、AIが社会に受け入れられるために考慮すべき論点を理解する。
- ⑦ 自らの専門分野にAIを応用する際に求められるモラルや倫理について理解する。
- ⑧ 機械学習（教師あり学習、教師なし学習）、深層学習、強化学習の基本的な概念を理解する。
- ⑨ 複数のAI技術が組み合わされたAIサービス/システムの例を説明できる。

このために、全学的に実施している授業アンケートの結果を総合的に分析することによって、学科ごとの傾向を把握して、学科による理解度の差が大きくなるように注意して、できる限り多くの学生にとって今後のさらなる「学び」につながるよう、改善を図っている。

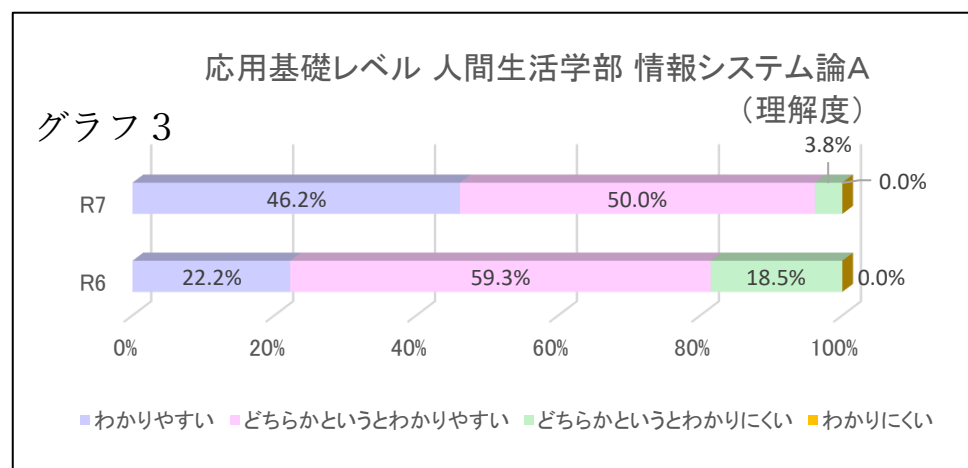
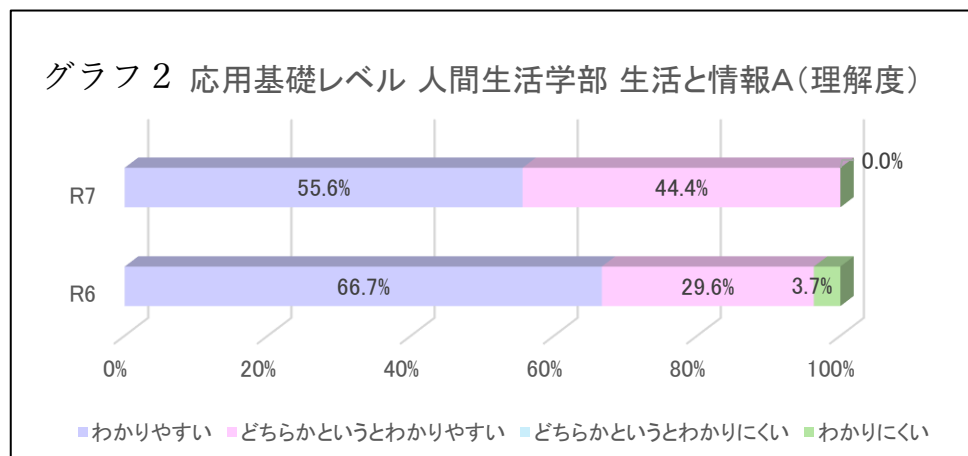
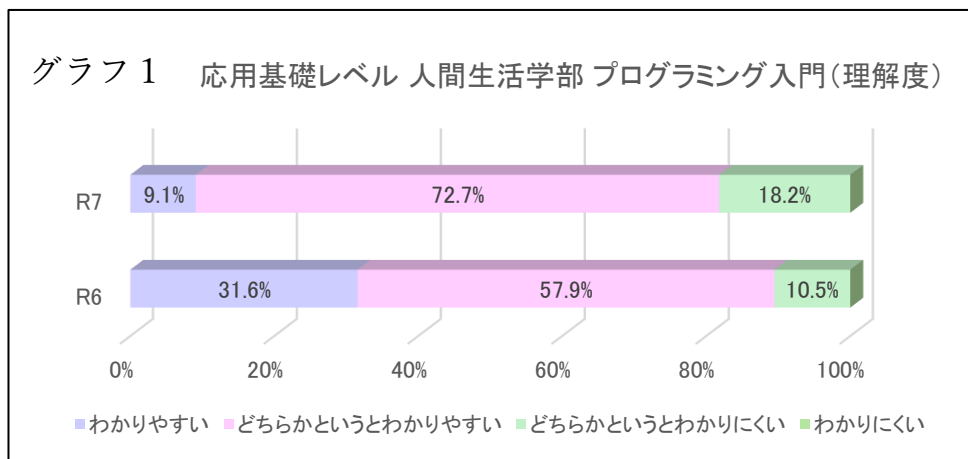
3 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度

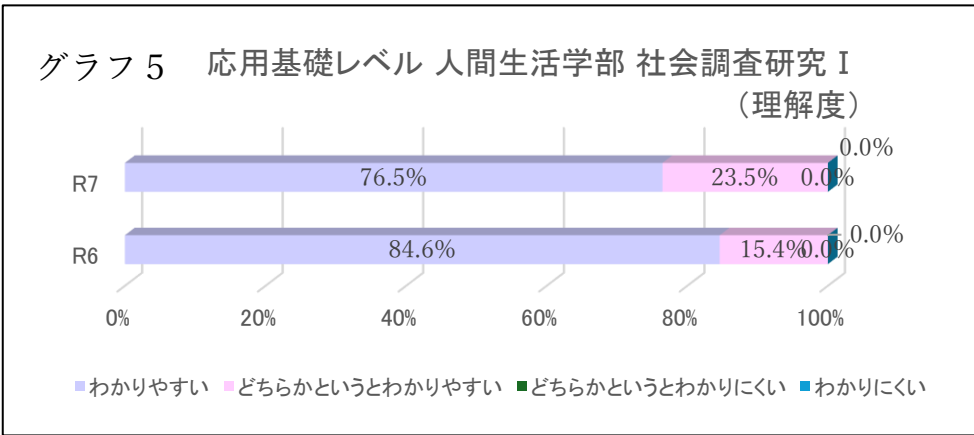
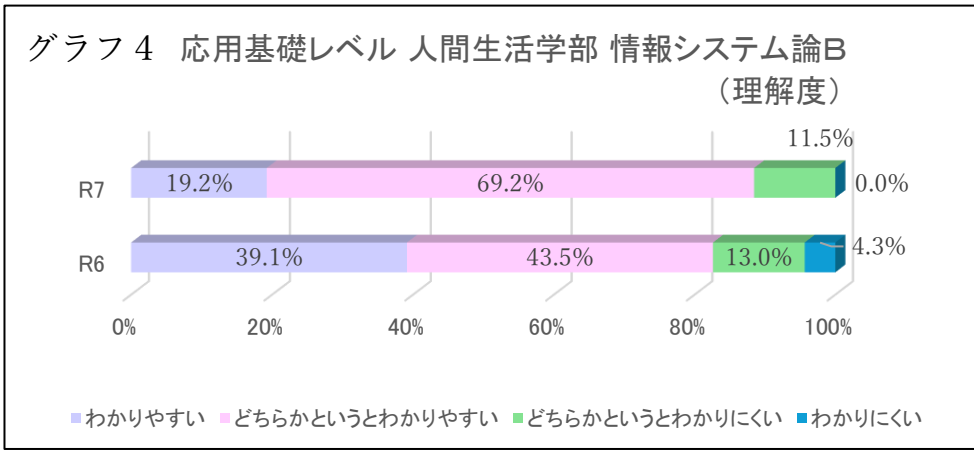
本学においては、全ての科目、全ての学生を対象にFD研究部会が「全学授業アンケート」を前・後期ごとに実施しており、本プログラムの構成科目についても、受講者全員に授業アンケートを実施し、学生の理解度等を分析している。

プログラム構成科目のうち、令和7年度入学生から新しいプログラムになるため、令和7年度における開講科目は、2年生で「プログラミング入門」「生活と情報A」の2科目、3年生で「情報システム論A」「情報システム論B」「社会調査研究I」の3科目となっている。

アンケート項目のうち、「わかりやすさ」について、「プログラミング入門」では、「わかりや

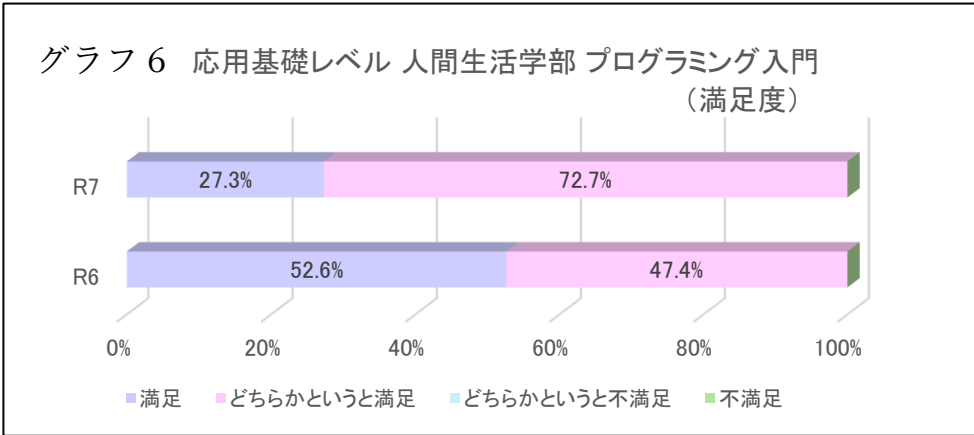
すい」「どちらかというとわかりやすい」をあわせて、R7:81.8% (R6: 89.5%) [グラフ1]、
 「生活と情報A」では、R7: 100.0% (R6: 96.3%) [グラフ2]、「情報システム論A」では、
 R7:96.2% (R6: 81.5%) [グラフ3]、「情報システム論B」では、R7: 88.4% (R6: 82.6%)
 [グラフ4]、「社会調査研究I」では、R7: 100.0% (R6: 100.0%) [グラフ5]であり、学生
 の理解度はかなり高い状況となっている。新しい教育プログラムへの移行期の中で、さらに「わ
 かりやすい授業」をめざし、指導内容・方法についての研究を重ねていく。



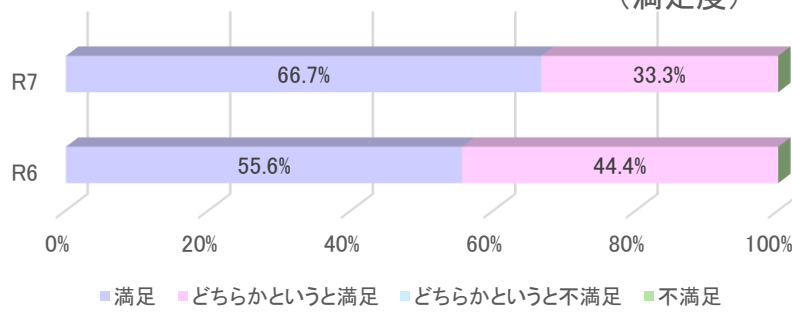


4 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度

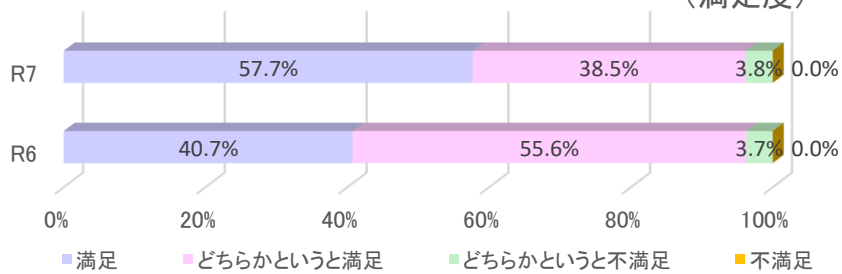
全学授業アンケートの結果で満足度について、「プログラミング入門」では、「満足」「どちらかという満足」をあわせて、R7:100.0% (R6: 100.0%) [グラフ6]、「生活と情報A」では、R7:100.0% (R6: 100.0%) [グラフ7]、「情報システム論A」では、R7:96.2% (R6: 96.3%) [グラフ8]、「情報システム論B」では、R7: 88.4% (R6: 82.6%) [グラフ9]、「社会調査研究 I」では、R7: 100.0% (R6: 100.0%) [グラフ10] であり、かなり高い満足度となっている。また、「AIについての理解や、プログラムで解析や画像処理をするのが面白く勉強になった。」「統計学について詳しく学ぶことができた。また、問題と向き合い、自分で考え答えを導き出すことに、楽しさを感じることもできた。」など、本プログラムに対して、さらに発展的な学修を希望するなどの意見も多く見られた。これらのことから、本プログラムの修得者の後輩等他の学生への推奨度は高いものと推察される。



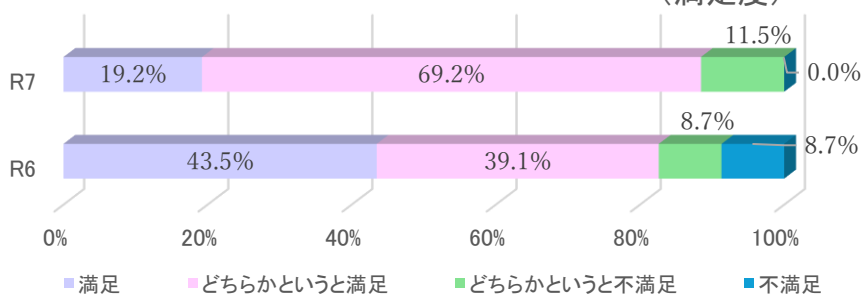
グラフ7 応用基礎レベル 人間生活学部 生活と情報A
(満足度)



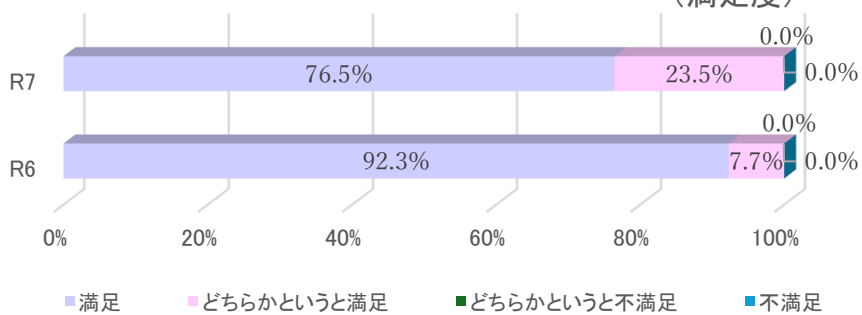
グラフ8 応用基礎レベル 人間生活学部 情報システム論A
(満足度)



グラフ9 応用基礎レベル 人間生活学部 情報システム論B
(満足度)



グラフ10 応用基礎レベル 人間生活学部 社会調査研究 I
(満足度)



5 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

本プログラムは人間生活学部メディアデザイン学科の専門科目9科目を人間生活学部の他学科全てに開講し、人間生活学部の応用基礎レベル教育プログラムとしている。令和5年度から本プログラムを実施しており、令和6年度までの2年間は、履修科目数が多く、修了要件が9科目17単位の修得が必要となっていたため、メディアデザイン学科以外の人間生活学部の学生は、全ての履修要件を満たすことが非常に難しかった。

これに対処すべく、令和6年度にメディアデザイン学科の教員が中心になって、本プログラムの構成科目の見直しを図り、令和7年度入学生から、メディアデザイン学科の既存の専門科目2科目（「メディアデザイン通論」「情報システム論B」）に集約したプログラムに変更した。さらに、メディアデザイン学科以外の学科の学生が応用基礎レベルの科目を履修しやすくなるよう履修ガイダンスの充実を図った。

6 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

本プログラムは令和5年度の入学生から実施しており、修了者は卒業していない状況である。

本学では就職支援部が卒業生や卒業生の就職先の企業、団体等に対してアンケートを実施しており、令和6年度は、2022年から2024年までの3年間に理学療法学科を卒業した人と就職した病院や事業所等に対し、また、令和7年度は、2022年から2024年までの3年間に看護学科を卒業した人と就職した病院や事業所等に対し、本学で学んだ学修成果を仕事で活かしているかなどのアンケートを実施した。今後は、アンケートの対象学科を増やすなどにより、本プログラムを修了した卒業生活躍状況等を広く把握できるようにし、プログラムの改善・充実に繋げていく。

7 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

本学では、就職支援部が地元企業等と本学の教育内容や学修成果に関する意見交換会を実施しており、令和7年度は6事業所に対して学修成果に関するアンケートを実施した。そのアンケート結果によると、学修成果の参考となる「ディプロマ・サプリメント」や「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」についての認知度はまだまだ低い状況であり、今後は本学の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」の取組について産業界への広報により認知度を高めるとともに、本プログラム修了者の学修成果についても、学生の採用者側としての意見や提言を積極的に聴取し、プログラムの改善・充実に繋げていく。

8 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

本プログラムは、①基礎的な数理的素養を含めリテラシーレベルの「選択（オプション）」をカバーする内容としたうえで、データサイエンス、データエンジニアリング、AIに関する知識・スキルを適切に補強することにより、自らの専門分野において数理・データサイエンス・AIを応用するための大局的な視点を身に付ける。②実データ、実課題を用いた演習など、社会での実例を題材とした教育を行うことで、現実の課題へのアプローチ方法および数理・データサイエンス・AIの適切な活用法の学習を組み込む。③主に学部2、3年を想定しつつ、個々の大学の実情、専門分野や進路等の多様性、意欲・能力のある学生の学修機会の確保を考慮し、柔軟にカリキュラムを設計する。④各大学・高専においてカリキュラムを実施するにあたっては、各大学・高専の教育目

的、分野の特性、個々の学生の学習歴や習熟度合い等に応じて、本モデルカリキュラムの中から適切かつ柔軟に選択・抽出し、有機性を考慮した教育を行う。⑤各専門分野の特性に応じた演習やPBL等を効果的に組み入れることにより、実践的スキルの習得を目指すことを推奨する、などを念頭に置いて教育プログラムを策定した。本プログラムの構成科目における授業アンケート結果から、前述の①～③の観点について、各授業科目レベルでの検証・評価を実施し、改善充実に繋げている。

9 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること

本学では、全学的に学生に対して「授業評価アンケート」を前・後期末に実施している。本プログラムの構成科目全てにおいても授業アンケートを行っており、授業のわかりやすさ、学生の満足度、改善点などの把握に努めている。さらに、授業評価アンケート結果について、本プログラムの授業科目レベルにおいて、授業の「わかりやすさ」、授業内容・水準が学生に適切であるかどうかの点検・評価を行い、教育の質向上に向けた改善充実に繋げていく。